

## 『有害な助言』は役に立つ助言か？児童文学作家グリゴリー

## ー・オステルの作品に見られる大人と子供の関係

《Вредные советы》 являются полезными советами? Отношения между взрослыми и детьми в произведениях детского писателя Григория Остера.

岩原 宏子<sup>1</sup>

## 要旨

本論文では、ロシアの児童文学作家グリゴリー・オステルの作品の持つ潜在的な教育的意義を創作手法と関連させて考察する。特にオステルの代表作である『有害な助言』シリーズと『子供とこれ』を取り上げて、大人と子供の関係について論じる。さらに大学において中級以上レベルのロシア語の授業やロシア文化の講義などでオステルの作品を使用する意味について論じたい。

## Аннотация

В данной статье исследуются особенности русского детского писателя Григория Остера, большой педагогический потенциал его произведений. В частности мы проанализировали тему отношений между взрослыми и детьми в его стихотворном сборнике «Вредные советы» и книге «Дети и эти». Отдельно затронут воорос об использовании его текстов в методических целях на занятиях по русскому языку и русской культуре на средних семестрах в университете Токай.

大人は子供から生まれたのです。また子供も大人から生まれたのです。

グリゴリー・オステル

## 1. はじめに

ロシアの児童文学と言えば、日本では『チェブラーシカ』（ウスペンスキーの原作をもとにしたアニメが有名）がまず頭に浮かぶ人が多いと思うが、ロシアにおいて、ウスペンスキーと人気を二分しているのがグリゴリー・オステルである。ソ連時代から活動している作家であり、1990年代から発行されている『有害な助言』シリーズ<sup>2</sup>は、一つの「ジャンル」として定着しているほどである。彼の作品は、日本でも紹介が始まったばかりであり、<sup>3</sup>ロシアで

<sup>1</sup> 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科, 005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1; E-mail: iwahara(a)tsc.u-tokai.ac.jp

<sup>2</sup> 参考文献の2-5を参照のこと。

<sup>3</sup> オステルの邦訳としては、毛利久美訳『細菌ペーチカ上・下』（2011）、東宣出版 同訳（2013）『いろいろのはなし』、東宣出版 同訳（2013）『悪い子のすすめ』、東宣出版（《вредные советы》の邦訳）がある。

もまだ本格的に研究されているとはいえない。オステルの作品は多面的な側面を持っているが、彼の創作の一番の特徴はユーモアであろう。また、一般的に児童文学において、子供の情動に訴える重要な要素は、笑い、ユーモアであると考えられる。オステルのユーモアはお互いに異質な存在としての大人と子供の関係を描くことから生じている。オステルの作品の特徴は、児童文学のジャンルに属しながら、作者自身がしばしば言及しているように、大人と子供の両方に読まれることを念頭に書かれたものが多いことである。<sup>4</sup> ここには、オステルの作品の隠れた「教育的な」意味があるように思う。本稿では、オステルの代表作である『有害な助言』と、「子供のための大人の本」、「大人のための子供の本」と銘打たれている『子供とこれら』<sup>5</sup>を論じることで、オステルの手法と作品の持つ「教育的」な効果にどのような関係があるかについて考察する。またオステルの作品の人気の理由についてもソ連崩壊後のロシア社会と関連させて論じたい。加えて、オステルの作品を中級のロシア語の授業や、ロシア文化の講義において教材として使う方法についても考察したい。

## 2. グリゴリー・オステルについて

まず、作家について紹介したい<sup>6</sup>。

グリゴリー・オステルは、1947年に現在はウクライナの都市であるオデッサの港湾技師の家庭に生まれ、ヤルタで育っている。16歳で大人のための詩を書き始めている。オデッサはロシア文学の伝統の中でも特異な位置を占めている都市である。ユダヤ人のコミュニティがあり、著名な作家たちを生んだ場所である。またユダヤ人ジョークなどで知られ「ユーモアの首都」とも言われることがある。オステルも少年時代からオデッサを訪れる作家たちと交流があったようだ。高校卒業後兵役（黒海艦隊に所属）につき、1970年モスクワの文学大学演劇科で学んでいる。通信教育で学び、12年間かけて卒業している。1975年に最初の児童文学作品『贈り物をするって何ていいんだろう』<sup>7</sup>を発表している。これは、オステルの作品の中でも特に人気のあるアニメの主人公であるうわばみ、サル、ゾウ、オウムの物語を集めたものである。この作品集にはいつている物語は、後に『38 オウム』等、別の題名で多く出版されている。『38 オウム』はアニメ化され、非常に親しまれている。

もともと詩人としてスタートしたオステルだが、児童文学作家になった経緯については「当時は検閲が厳しかったので児童文学に移った」とインタビューで述べている。しかし、実際に児童文学作家になってみて子供のために書くことが気にいったと述べている。<sup>8</sup>非常に多作な作家で、児童文学作家、詩人、脚本家として活躍しており、アニメ化された脚本は80を超える。

2012年には、優れた児童文学作家に送られる「コルネイ・チュコフスキー賞」を受賞して

<sup>4</sup> Григорий Остер: «Заставлять ребенка читать скучную книгу-учить его вам не верить» //Аргументы и факты.27.11.2009.URL:<http://www.aif-nn.ru/article/9160/14>

<sup>5</sup> 原題:«Дети и эти»

<sup>6</sup> 本節以下の叙述は以下による。《ДЕТСКИЙ ПИСАТЕЛЬ-ГРИГОРИЙ ОСТЕР》  
<http://www.oster-detyam.ru/> Григорий Бенционович Остер (род. 27.11.1947, Одесса)  
URL:<http://www.rodb-v.ru/writers/oster/>など。

<sup>7</sup> 原題: «Как хорошо дарить подарки»

<sup>8</sup> ロシアのテレビ番組「創造者たち」で「大人の本は書かないのか」という質問に対して答えている。

いる。また、特筆すべき仕事の一つとして、2004年から「子供のためのロシア大統領のサイト」の運営があげられる。子供たちにロシアの文化や政治を、わかりやすく説明する目的で開設されたものであり、「子供の権利条約」を子供の言葉でわかりやすく解説するコーナーもある。文学の幅を超え広い活動をおこなっているといえよう。5人の子供の父親である。

### 3. オステル登場の背景

ソ連時代には、イデオロギー臭の強い児童文学が多く見られた。その後、ソ連が崩壊してからは、出版界では、商業主義が幅をきかせ、何よりも売れる文学が主流になったが、児童文学の世界も例外ではなく、ハリポッターブームがあったり、推理小説・探偵小説のブームがあった。もちろんロシアの民話や、日本でもよく知られているマルシャーク、チュコフスキーは相変わらず読まれていた。しかし、社会の変化に応じた質のよい児童文学が要求されていた。既存のソ連の児童文学や西欧の児童文学だけでなく、ロシアの作家の作品が要求されたとき、市場に現れたのは通俗的な文学であった。ルドワは当時の状況について次のように述べている。通俗的な文学は「ソ連時代には、二流か『低級』と看做されていたかまっただくなかったようなポピュラーなジャンルの文学」<sup>9</sup>であり、「教育者たちは、その通俗的な作品を文体や言語の破綻」<sup>10</sup>とみなしていたと。ちょうど、外国の作家ではなくロシアの作家が求められてはいたが、ソ連崩壊直後で価値観が多様化し、混乱していた時期にベストセラーとなったのがオステルの『有害な助言 вредные советы』であった。優等生的な、素直な子供を推奨するような教育的な作品ではなく、言葉の遊戯の要素が多く含まれた、お説教とは無縁の作品である。大人から「してはいけない」といわれることをしてしまう子供たちの行動に、屁理屈とも言えるような理由をつけて、それを詩の形で助言するというもので、これによってオステルは新しいジャンルの開拓者となったのである。この『有害な助言』は、後にも述べるが、ソ連時代に一部が書かれていたものの、その辛辣な内容ゆえ当時はほとんど活字として発表されることはなかった。また、彼の作品は、ナンセンスな要素を持つ「遊びの」文学の伝統<sup>11</sup>を汲むものであったが、こういった文学はモラルを教えるものではなかった。このようなジャンルの作品は、60年代の雪解け時代に「児童文学」などの雑誌に掲載されていたが、ルドワの指摘によれば、「このような子供向けの詩の繁栄は、『雪解け』の終わり『停滞』の時期の始まりの時期に終わった」のであった。そして、「オステルのパラドックスは、まさにこの停滞の時期に創作活動を始めたこと」であった。<sup>12</sup> 停滞の時期の70年代から創作を始めたオステルは、大人の文学でなく、児童文学に活路を求めたが、パリャージナの指摘によれば「オステルは、レーニンと共産党に関する詩のあとにできたイデオロギー上の空洞を埋めた」<sup>13</sup>というように、ソ連が崩壊するとともに注目されたのであった。ソ連崩壊後に人気となったファンタジーなどのいわば世界的人気のあるジャンルとともに、ロシアの新しいスタイルの児童文学として登場したのであった。ロシアの社会変動を念頭においた文学であった

<sup>9</sup> Рудова Л.: Остер от вредных советов до предидентского сайта//Неприкосновенный запас.2008. No.2(58).URL:<http://magazines.russ.ru/nz/2008/2ru16.html/>

<sup>10</sup> 同上

<sup>11</sup> Рудова Л.: Остер от вредных советов до предидентского сайта//Неприкосновенный запас.2008. No.2(58).URL:<http://magazines.russ.ru/nz/2008/2ru16.html/>

<sup>12</sup> 同上

<sup>13</sup> Порядина М.: Бесполезные советы//Детская литература1999. No.2-3. С.28

のである。

ペレストロイカ以前のオステルは、主にアニメーションや人形劇の脚本作家と知られていた。新生ロシアで、彼の人気を不動にしたのは、前述の『有害な助言』シリーズや、「生涯学習シリーズ」と銘打った『教科書』シリーズ（物理、数学の「問題集」や、『パパママ学』、『アパート学』など、オステルが創り出した実在しない『学問』の参考書）などである。ルドワは次のように述べている。

ロシア文化とロシア児童文学におけるオステル現象に並ぶものはいない…、彼の『有害な助言』は驚くべき売れ行きをしめし、子供の教育に関するテレビ番組などでの彼の人気は揺るぎない、「オステルはあまりに、自由自在（ユビキタス）であり、彼は、ロシアの児童文化に自分の国を作ったといっても過言ではないだろう<sup>14</sup>

オステルの作品は民主化と自由がはじまったロシアでこそ人気を得たといえよう。

オステルの作品の特徴としては、遊びの要素が多く、子供のフォークロア（怪談話など）から多く作品の題材を求めていること、いわゆる教訓的な押し付けがないこと、児童文学と銘打っていても、大人と子供両方に向けて書かれていること、皮肉、誇張、洒落、地口、パロディー、ナンセンス、読者の期待を裏切る意外な展開、逆転、グロテスクなどのユーモアのあらゆる手法が用いられていることなどがあげられるだろう。<sup>15</sup>

#### 4. 『有害な助言』 Вредные советы (副題 悪い子とその両親のための本)

##### 4-1 『有害な助言』が書かれた経緯とその特徴

オステルの創作の特徴である、ジャンルのヒエラルキーを超えて、あらゆるものを相対化し、時にはナンセンスな笑いを引き起こすという手法は、初期の作品、例えば『菩提樹通り神話』(1980年)にも現れている。しかし、この作品の笑いは、子供が物語をつくって仲間で楽しんでいるような雰囲気をもっている。ソ連時代に書かれたということもあるが、笑いは、『有害な助言』におけるほどまだ毒気は強くない。純粹に感覚的に面白いと笑えるような性質のものだ。ただ、大人が子供以上に異常な行動をしたりする状況はその後もオステルの作品でみられるものだ。

ロシア語の口語的表現に<sup>ブラコール</sup>прокол という言葉がある。<sup>ヴィホトカ</sup>выходка ともいい、皮肉のきいた冗談のことをいう。オステルのこの作品はまさにこの典型といえよう。『有害な助言』は、詩による『助言』という児童文学における新しいジャンルとして定着した。子供というものは元来、ひねくれものであり、グロテスクで汚いことを好んだり、「してはだめ」と禁止されると、逆にそれをしたくなるものなので、それなら反抗的な悪い子に対して、逆に悪いこと、してはいけないことを勧めたらどうか、という逆転の発想で書かれた。そしてその「教育」の主要な手段は笑いと皮肉である。オステルの子供向けの作品は基本的に散文で書かれているがこれは詩の形式で書かれている。ロシアでは日本よりも詩を暗記して朗読することが多

<sup>14</sup> Рудова Л.: Остер от вредных советов до предидентского сайта//Неприкосновенный запас.2008. No.2(58).URL:http://magazines.russ.ru/nz/2008/2ru16.html/

<sup>15</sup> Rudova L.: Invitation to a Subversion. The playful literature of Grigorii Oster :Russian Children's Literature and Culture,2008. p327

オステルと、子供の間で語られている怪談話との関連については、越野剛「ロシアの子供の怪談(ストラシルキ)」(『スラブ研究センター研究報告シリーズ』88号、2002)を参照

い。古典の詩のように、オステルも子供たちが暗記して朗読してくれることを念頭に書いたのだろう。『有害な助言』は「話し言葉」のジャンルに属する。また、『有害な助言』のようないわゆるナンセンスな詩は、イギリスのリメリック（滑稽五行詩）などにも例があるし、ロシアのオベリウ（ハルムスを代表とする。1920年代に不条理文学を標榜したグループ）の伝統を受け継いでいることは指摘されている。<sup>16</sup>

筆者が把握している範囲では、現在第4巻まででているが、オステルはこれ以外にもさまざまな『助言』を発表している。<sup>17</sup>

最初の助言は1975年に書かれたもので、以下のようなものだった。

「勇気あるコックさん」

もし両親がいないとき一人で家にいたら、パパの靴に、ママの香水をいれて、その靴を、ママが朝からつくっていたスープにいれなければならない。そして蓋をしてきっちり70分間煮るんだ。何ができるかは大人が帰ってきたらわかるよ。

この助言について、オステルは、「親がいないときに子供が台所で『何をしているのだろうか』と考えたことから思いついたと述べている。<sup>18</sup> また「当時はまだこのような助言は発表できず、90年代初頭までは、ほとんど地下出版で読まれていたと述べている。<sup>19</sup> 実際にこの助言が雑誌に掲載されたのは1983年、雑誌「カラボック」（ソ連時代からソ連崩壊直後まで発行されていたソノシート付の児童向けの雑誌）においてであった。1986年に発表されたアニメーション『有害な助言』は「愉快的なメリーゴーランド」というオムニバス映画の一つとして次の「助言」をほぼそのままアニメ化したものである。

もし、パパとママのところに、おばさんが来て、何か大切な、まじめな話を始めたら、おばさんに気づかれないように後ろからそっと近づいて行って、それから大きな声で耳元で叫ぶんだ、「とまれ、降参しろ、手をあげろ！」って。おばさんがびっくりして椅子から落ちて、ドレスに紅茶か果汁かキセリをこぼしたら、おそらく、ママは大声で笑い、パパは自分の子供が誇らしくて君の手をぎゅっと握り、どこかに連れていくだろう。そこで、多分パパは長い間君を褒めるだろう。

オステルは、『有害な助言』を書いたのはただの思いつきではないことを説明して次のように述べている。

いうことを聞くばかりの子供のいる国では、その子供たちから従順な大人ばかりができる。それは多くのひどいことに満ちている。－共産主義の建設が始まり、全体主義的な体制が繁

<sup>16</sup> Г.К.Каурова : Люди и книги-Мемуары великих. Труды неизвесных,замечания посторонних. URL:<http://www.az-libr.ru/index.htm?Persons&000/Src/0010/38da026c>

<sup>17</sup> 他に『いうことをきかないビジネスマンのための有害な助言』（2009）、『少し大きくなった子供の父親のための有害な助言』（2009）などがある。

<sup>18</sup> Григорий Остер и Андрей Бильжо-презентация в Библио-Грубусе... URL:<http://genefis-gbr.ru/grigorij-oder-i-andrej-bilxo-v-biblio-globuse/>

<sup>19</sup> 同上

榮して、不愉快ことが多く起こる。だから、いうことを聞かない子供は必要なのです。かれらが生き残るように努力してきたのです。<sup>20</sup>

オステルは、「ソ連時代教えられていたステレオタイプ化された共産主義的教育とそれを子供たちに教えてきた不幸な大人たちのために」<sup>21</sup>助言を書いたのである。子供のための作品とはいえ、教育的にみてタブーであることを取り上げていることは、ソ連時代の画一的なものを押しつける体制への皮肉・批判があると解釈され発表に制約を受けていたのである。

『有害な助言』はブラックユーモア的要素を多く含んだものとなっている。子供の日常生活(家庭、学校、友人関係、一般の大人たちとのつきあい)を題材にしている。ここでオステルは敢えて子供がよくおこなう悪さを強調して、まずそれをするを「勧め」る。表面的には、ふざけ過ぎている、残酷だ、不快だという印象を与えるのである。また挿絵も、グロテスクなイメージを高めるのに十分である。子供の視点で見ると、日常生活で普通に思われていることが時として、まったく普通のことでなく、大人の価値観で勝手につくられたものとして映る。オステルは『助言』で、悪いことをすすめる。しかし、逆転した発想からすれば、その行為を何らかの形で正当化しなければならない。悪いことがいいことになるためにはと考えるのである。オステルが提示している言い訳は、機転のきく子供であればきっと考えつくような屁理屈だ。そしてその言い訳が、本来は悪徳であることの言い訳なのだから、当然、多くの場合ナンセンスであり、極端に誇張されたものである。しかし、ブラックユーモアであっても、冷笑的な深刻なものにならないことが多いのがオステルの特徴だ。

『有害な助言』は、両親のための本とも明記されていることで、大人と子供の相互関係から生ずるおかしみがより強く感じられる。オステルの基本的な姿勢は次の通りであると思われる。大人と子供の間にはお互いに理解できないという壁が存在する。しばしば大人は、子供は何もわかっていない、子供は大人が支配できていると思っている。しかし、実際には、子供は大人と比べて権威主義などにしばられないので、自由に思考することができ、事の本質を理解することもできる。

#### 4-2 『有害な助言』の内容について

まず序文をみてみよう。

第1巻 「いうことをきかない子供とその両親のための本」となっている。

序文 最近、学者は、なんでも逆のことをする反抗的な子供たちがいることを発見しました。一中略—このような子供たちには、役に立つ助言ではなく、役に立たない、悪い助言を与えるべきと考えました。彼らはすべて逆のことをするので、正しくなるというわけです。この本は、いうことを聞かない子供のための本です。

そして、「いうことを聞く子供は読んではいけない」と但し書がある。

第2巻

序文 以前、学者は、有害な助言は反抗的な子供しか読んではいけないと考えていました。

<sup>20</sup> Писатель Григорий ОСТЕР: «Если ты не смог на карте отыскать свою страну, не оплакивай Отчизну-географию учи» «Газета Бульвар Гордона».

URL:/www.bular.com.ua/arch/2011/4/4d3eeb8db8eab/

<sup>21</sup> ロシアのテレビ番組「創造者たち」での発言

- 中略-しかし、最近になって、いうことを聞く従順な子供たちにも有害な助言はやはり必要なのではないかと考えるようになりました。良い子にとっては、悪い助言は、愚かさに免疫をつける予防注射のような役割を果たすことがわかりました。現在、学者たちは悪い子も、良い子も、すべての子供たちに危険な助言を読むことを許しています。

### 第3巻

序文 注意！ 脳にとって危険！

有害な助言は、愚かさを予防する注射です。

この本は、いうことをきかない子供と、その両親と先生のための本です。良い子は、1日に多くても3つの助言しか読んではいけません。その際には、念の為に良い子は縄で椅子に縛り付けて置くことをお勧めします。そうでないと、危険な助言を聞いた良い子は、この恐ろしい本に書いてあることをすべて実行するでしょう。

「愚かさに対する予防注射」という表現を考えてみよう。オステルはこの表現を繰り返し述べているが<sup>22</sup>、これは『助言』が逆説的な意味で「教育」的な効果をもつことを示している。インフルエンザの予防注射が悪いという人は少ないのと同じ理屈で、「悪さ」をあらかじめ教えておけば子供は実際に悪いことをしなくなるだろう、という考えである。確かに誰もが考えるのは、子供たちの中にはこのような助言を本気にして悪いことをしてしまう子がいるのではないかということだ。しかし、「オステル自身が、「今まで私の助言を読んでそれを行動に移した例は聞いたことがない」と述べている。<sup>23</sup>「愚かさを防止する予防注射」という作者の言葉通り、これをユーモアとして理解するロシアの子供たちは、むしろ楽しく読んでいるようだ。このオステルの発言から、子供たちや大人に対し、「助言」の笑いを通じて、「予防注射」が役にたつように、何らかの効果があることを期待していることも感じられる。『有害な助言』というタイトルがすでに逆説的であり、「良いことを助言する」ことが普通で、いけないことをすすめるということは既成概念を打ち破ることである。オステルの『助言』は常にパラドックス志向、時には開き直った姿勢から生まれる。

いくつかの『助言』を紹介しよう。

(1) カエルを棒でなぐってみよう。とても楽しいよ。

ハエの羽をむしるのもいい。やつらは歩けばいい。

毎日そのように鍛えていけば、いつか君にチャンスがきて

どこかの帝国で一番えらい処刑人になれるかもしれない。

<sup>22</sup> Григорий Остер : Вредные советы –прививки от глупости//Российская газета04.02.2004.

URL:<http://www.rg.ru/2004/02/04/oster.html>

<sup>23</sup> Писатель Григорий ОСТЕР: «Если ты не смог на карте отыскать свою страну,не оплакивай Отчизну-географию учи»《Газета Бульвар Гордона》.

URL:[www.bular.com.ua/arch/2011/4/4d3eeb8db8eab/](http://www.bular.com.ua/arch/2011/4/4d3eeb8db8eab/)

(2) 知り合いのところにいったら誰とも挨拶してはいけない。どうぞ」や「有難う」も誰にもいってはだめ。そっぽを向いて、誰の質問にも答えるな。そうすれば誰も君をおしやべりとは呼ばないだろう。

(3) 友達を殴ろう。毎日 30 分ずつ休みなく。そうすれば君の筋肉はレンガよりも強くなる。その強い腕で、敵が襲ってきた時、大変な時に友達を守ってあげることができる。

(4) 君の家が火事になったりしないように、家を出るときにはアイロンを持ってよう。掃除機やホットプレート、テレビ、電気スタンド、できたら電球も一緒に、隣の庭に持ち出そう。もっと念をいれるなら電線もみな切ってしまう。君が住んでる地域ごといっせいに停電するように。そしたら君もほっと一安心。君の家の火の用心はばっちりさ。

(5) もし君が進路を決めていなくて、どこからキャリアを始めていいかわからないときは、玄関のランプを壊して歩きなさい。人々は、君に「ありがとう、あなたは国民の電気の節約に一役かってくれるでしょう。」というでしょう。

この助言については、オステルは、「皆この詩を書いたのは私だということを知ってくれなかった。誰もがポピュラーなアネクドート（一口話）として知っていたからね」と述べている。<sup>24</sup>

(6) 手で決してどこも触ってはいけない、どこにも首をつっこんではいけない、どこにも入り込んでもいけない、だまってはしっこに寄って動かずに、年をとるまで立っていなさい。

E. ポレワは、オステルは、人気はあってもブラックユーモアの作家であるという評価に対して「まず、オステルが準拠しているジャンルの伝統、第二に子供のためにオステルが創作した作品の全体量、そしてインタビューでの自分の作家としての、また教育的な立場の説明を考慮したときオステルの創作の教育上の潜在力は、修正される必要がある。」<sup>25</sup>と述べ、ジ

ャンルの伝統とは、フォークロアの一種で「<sup>ニエネビーリツツァ</sup>небылица」（一般的にユーモラスなありえない作り話をいう：筆者注）と「逆転」のある結末だと述べている。<sup>26</sup> 子供たちは、詩で書かれた『助言』の皮肉を理解しながら、あえて誇張された表現を楽しんでいるのである。松谷さやか氏によれば、『有害な助言』のいくつかは、2010年発行の小学校3年生用国語教科書に掲載されているという。<sup>27</sup> オステルは、ユーモアを引き起こす要因である、人物の面白さ（いわゆるいい子ではない、色々な悪さを考えつく子供たち）、ユーモアの様々な技法をもちいること、短い詩の中で、逆転した筋を用意して、常に読者の期待を裏切ること、を実現してい

<sup>24</sup> Григорий Остер: “Я пишу свои книги для гениев2010.09.25 URL

<http://www.eurochicago.com/2010/09/grigoriy-oster-veya-pishu-svoi-knigi-dlya-genievve/>

<sup>25</sup> Е.А.ПОЛЕВА : Педагогические взгляды детского писателя Г.Остера и особенности их выражения//Вестник ТГПУ(TSPU Bulletin).2013.6(134).с.86.

<sup>26</sup> 同上

<sup>27</sup> 松谷さやか「ソ連崩壊後の児童文学」（長塚英雄責任編集『ロシアの文化・芸術』、生活ジャーナル、2011年、162-164頁）



る。逆転した内容を読むと、皮肉だけでなく、作者の客観的・冷静な態度が読み取れ、読者も頭の中で事物をひっくり返して考えるようになる。オステルのユーモアは常識をくつがえすようなナンセンスなものが多いが、ナンセンスな笑いは、緊張感を解きほぐし、解放的な気分にしてくれるものである。本来ユーモアはあまり諷刺性を含まないものだが、『有害な助言』は、諷刺、社会批判にも富んでいる。オステルの助言が、イデオロギー的な制約があった中から生まれたからだ。

#### 4-3 大人にとっての『有害な助言』

『有害な助言』は大人にとってどのような意味をもつだろうか。

オステルは「私の助言は、ちょうど何層にもなったパイのようなものだ」<sup>28</sup>と述べているが、助言の多くが、子供のためだけでなく、大人たちに対しても書かれているということは非常に重要である。<sup>29</sup>例えば同じ助言でも子供の感じ方と大人の感じ方は違う」といっている。オステルの作品のユーモアは両方に向けられたものである。大人の行動を描いたオステルの「助言」を読むと、子供が大人を教えている印象すら与える。これは、状況を逆転させた重層的なユーモアによって、子供と大人の両方の視点から事物をみることを可能にしているからだ。オステルの作品は、「幼い子供にとっては言葉遊びを純粹に楽しめるものであり、もう少し年上の子供にとっては語呂合わせやナンセンスであり、もう少し上の子供にとっては皮肉であり、大人にとっては諷刺やパロディーなのだ」<sup>30</sup>

オステルは常にユニークな方法で子供たちとコミュニケーションする方法を見つけることに成功している。彼は、本の中で、『小さな子供たち』を見下す大人として彼らと話すことは決してしない。善と悪を判断できる子供たちの自然の能力を信じている。最も重要なことは、それを道徳として教えることなく、ゲームの形でおこなっていることだ<sup>31</sup>。ゲームの形で子供と交流しているということは、言葉遊びやユーモアをかいしてということだろう。

子供だけでなく、大人にも向けられた、大人の社会を皮肉った『助言』も多い。

年をとったら、外は徒歩で歩こう。バスに乗ってはいけない。結局立っていなければならぬだろう。今日、席を譲るようなバカは少ない。ずっと先にはまったくいなくなるだろう。

今でも席を譲ってくれない人が多いのだから「君たち子供が大人になる頃には誰も譲ってくれないよ」という「助言」である。

大人と子供の関係を皮肉に描いているのは、『有害な助言』の特徴だが、常に「真実」をみすかされているのは大人だ。大人のずるさを諷刺している代表的な「助言」として次のような助言があげられる。

<sup>28</sup> Григорий Остер : «Заставлять ребенка читать скучную книгу –учить его вам не верить» //Аргументы и факты.27.11.2009.URL:http://www.aif-nn.ru/culture/article/9160/14.

<sup>29</sup> Е.А.ПОЛЕВА : Педагогические взгляды детского писателя Г.Остера и особенности их выражения//Вестник ТГПУ(TSPU Bulletin).2013.6(134).с.87.

<sup>30</sup> Рудова Л.:Остер от вредных советов до предидентского сайта//Неприкосновенный запас.2008. No.2(58).URL:http://magazines.russ.ru/nz/2008/2ru16.html/

<sup>31</sup> Grigory Oter ./URL:http://www.elkost.com/authors/oster

ヨールカ祭り（筆者注：クリスマスのお祭り）、まっさきにプレゼントをもらってサンタのおじさんがこっそり横取りしていないかしっかりみはろう もらったお菓子はのんきにそのまま家に持って帰ってはいけない。パパとママに半分とられてしまうから。

オステルは、大人の強欲さも描くことを忘れない。また、オステルは常に子供の視点からみているので、大人の行動の矛盾をあばくことになる。他に大人の本質を皮肉った「助言」としては、「君が壁に絵をかいているところをママにみつかったら、それは国際婦人デーのためのママへのプレゼントだといいなさい」のように、大人は、おだてやもっともらしい理屈には弱いことが見透かされている助言も多い。

もし、ケーキを買ってもらえず、夜、映画につれていってもらえなかったら、パパとママに怒りなさい。寒い夜に帽子もかぶらず家をでるんだ。でもただぶらついているんじゃないで、暗い森にいくんだ。そこでは、腹をすかせた狼が君を襲ってパクッと食べてしまうだろう。そうしたらパパとママは君がいなくなったことに気づいて、叫んで、泣き出して、飛び出してケーキを買いに急ぐだろう。そして夕方には映画につれていってくれるだろう。

自分の希望がかなえられなかったと、親に悪態をつけて家から出て行ってしまう（しまいなくなる）というのは子供にはよくあるパターンだ。日常的な光景だろう。しかし、ケーキを買ってもらえないという些細なことの結果が「狼に食われる」というまったくかけ離れたことなので、日常の光景から不条理な世界へと子供を引き入れている。このタイプの助言からは、大人は、嫌なことには関わりたくないの、子供がわがままをいうと、折れて妥協してしまう自分たちの弱点を遠まわしにいわれているとを感じるだろう。かつて子供だった大人こそ、自分の子供時代を思いだしてほしいとオステルは主張しているのだ。『有害な助言』の子供は、わがまま、自己中心的で、生意気で、人の不幸を喜び、悪賢い。しかし、子供の立場になって考えると、それは子供としては普通のことなのだ。そしてそういう子供に対して、「いい子でありなさい」という大人も、自分が子供の時にしたいと思ったことを忘れていたという考えがオステルにはある。それを皮肉っている助言は、ある意味で、大人に対してもユーモアをかいしての教育となっているともいえる。オステルの『有害な助言』は、たとえ少し苦いユーモアであっても子供たちの遊び心を刺激し、圧倒的に支持された。大人の中には辛らつな皮肉を苦々しく思った者も多くあるにちがいない。筆者の意見では、一見教育的でないと思われるオステルの『有害な助言』の中に、大人(親)と子供の関係をどのように築いていくべきかを考えるヒントがあるように思われる。大人にとっての諷刺となっている例としては、ソ連時代の全体主義に対する強烈な批判と、自分たちも間違いを犯すのに、子供を許すことはできない大人を皮肉ったり、大人の実態を暴いてみせるものと2種類がある。ヒエラルキーを嫌うオステルにとっては、大人も権力であり、ソ連時代の制約、共産主義のイデオロギーと同様なのだ。もちろん、ソ連時代を諷刺した作品（例として、ソ連国歌や革命歌のパロディー）などは、ソ連時代を知らない子供たちにはオステルの隠れた抗議は理解できないだろう。

#### 4-4 ロシアで『有害な助言』がどのように受け入れられているか

ロシアの小学校の国語教科書に『助言』が掲載されていることを述べたが、実際にロシア人は『助言』をどうみているのか。国語教科書は3年生用であることから、9歳ぐらいの子供がオステルの作品の主な読者ということになる。この年齢では子供の読む本の選択権はまだ親にあるだろうから、親の意見は重要である。筆者の知り合いで児童文学に関心のある33歳の女性に（7歳の子供あり）に尋ねたところ、少数意見ではあるがとことわった上で「私が低学年、中学年頃にはまだオステルの『助言』はなかった。個人的にはオステルの『助言』は好きではない。15歳から16歳の時に読んだときは最初の助言のいくつかは面白いと思ったが、あまりに大量になりすぎて嫌気がさした。俗悪で、遊びすぎではないかと思う」という意見であった。他にもインターネットなどでは様々なレビューが掲載されているが、いくつかを紹介しよう。

#### 肯定的な意見

- ・オステルの作品が学校のカリキュラムにあるのは問題ないと思う。
- ・この本は子供が「私が、私が」というようになって、考えられないような行動をしたり、何でも即やりたくて急いでやるようになってから読むのがいい。オステルは読者に対して押し付けることなく暗示している。「少しの間止まって自分をみてごらん、回りの人間をみてごらん、行動についてよく考えてごらん」と。同時に、様々な状況に対して子供にユーモアの感覚を発達させるのに役立つ—怒ったり、絶望したりばかりではいけないこと、うまくいかないからといってすぐがっかりしたりしないことを教えてくれる。

・『助言』はあまり小さい子には向かないが、10歳以上の子供、特に大人は満足を得るだろう。

#### 否定的な意見

- ・私の子供の反応は否定的だった。退廃的だ。買う前に子供と相談したほうがいい。
- ・くだらない。気に入らないし、子供に読んでやるつもりもない。不快だ。

全体として、肯定的な意見が多いが、オステルが、自分の『助言』に従うような子供はみたことがないといっているものの、幼児に読んでやることは、文字通りとってしまう可能性があるのでよく考えたほうがいいという意見も多い。また正規の授業に『助言』をいれることにも賛否があるようだ。

## 5. 『子供たちとこれら』 Дети и эти (2011)

この本は「子供のための大人の本」、「大人のための子供の本」との副題がついている。大人と子供の間を描くというオステルの基本的姿勢は変わっていないが、『有害な助言』が子供を取り囲む様々な社会環境を題材にしているのに対し、ここでは「親と子」という関係を中心に描かれている。この副題は、子供にとっては大人を理解し、大人にとっては子供を理解するために書かれた本ということの意味していると思われる。つまり、大人が読むべきであるという作者の姿勢がより強く感じられる。

ユーモアに満ちた短編が集められており、どの作品においても子供と大人が入れ替わるという状況が設定されている。「これら」というのは「大人たち」のことで、ここでは子供が普通おこなうことをしたり、子供にありがちな状態になるのは大人たちである。大人がいく仕事場も、子供の学校のように「大人」らしくない大人ばかりである。この逆転によっ

て、大人たちが普段子供にさせていることが子供にどう受け取られているかがわかる。各短編は一見独立しているように見えるが、実は同じ登場人物がいくつかの物語に登場してきて、全体として「わがままで、頑固で、いたずらをし、物をなくし、けんかをする」大人たちを主役である子供たちが「いさめたり、なぐさめたり、教え諭したり」して大人より賢い態度をとる、という構成になっている。親と子の葛藤は深刻な問題ではあるが、ここではユーモラスな、尋常でない状況が設定されており、また多くがハッピーエンドで終わっている。これを讀んだ大人たちが不快な気分になるということはない。

ある短編では、女の子が母親をバレリーナにしようと思いつく。母親は最初嫌がるが娘にバレエ学校に、連れて行かれ、結局バレリーナになる。別の短編では女の子が、マフラーがちくちくするといっちはずそうとする父親を、外出先でもマフラーをはずしていないか携帯でチェックする。結局父親は、いいわけが高じて、ポケットに爆弾をいれていると警察に誤解されてしまう。子供を大人に入れ替えて読めば、大人はしばしば子供を信用しておらず、子供が嫌がることを大人がさせてしまっていることが多いことを読者に感じさせる。

『赤バラと白バラの戦争におけるリボンのついたエプロン』は以下のようなあらすじだ。子供たちは、父親が一人では何でもできないとされていて、すべてにおいて世話を焼き、口をだす。父親が仕事に行くときには、靴ひもを結んでやる。父親は、花を栽培する会社の社長で、オランダからチューリップの球根を輸入しようとしている。子供は、オランダから買うのはだめといい、指示書を書き換えてしまう。父親は嫌がるが、子供たちのいうことを聞く。あるとき子供は、赤いバラをもっとつくったらというが、父親は白バラがいいという。子供たちのしつこさにつきあってきた父親は、自分を信じてくれない子供に対して、自分のやり方でやりたいと考えるようになる。ここでこの父親が、他の短編で、家の鍵をなかなか渡してもらえなかった父親であることがわかる。その時は鍵をなくさないように首にかけて会社にいったのだが、ある子供にだまされて鍵を渡してしまったのだ。赤いバラに関する指示書にサインするようせまる子供たちに対して、今はサインはしないが、明日重役会議にかけるといふ父親に対して、子供は会議に押しかけて父親が社長にふさわしくないと社員の前で言うという。父親は観念するが、今度は、重役会議には、リボンのついた母のエプロンをしていきなさいという。父親が理由を聞くと、前の会議で社員たちが休憩時間に食べ物を投げ合って服を汚して帰ってきたからだという。新しいスーツを汚してはだめという子供たち。父親に寝る前に足を洗いなさいと言った後、子供たちは次のように言う。

パパはやっと寝たが、子供たちはため息をついて、いつかはパパがわかってくれるだろうとお互いに言った。だって子供たちはいつもパパに良かれとだけ思っていたのだ。そしてパパは子供たちに感謝してくれるだろうと思った。(68頁)

『子供とこれ』は、子供と親の相互関係を描いた寓話ともいえるだろう。この作品で描かれている状況は、親が子供にいたずらをするなど混乱を極めている。前述したように、オステルは、子供と親の間には越えられない垣根があると考えている。実際、親と子の断絶の問題は深刻なものである。しかし、上の作品の例でもわかるように、オステルはユーモアによって、親も子供もその深刻さを文字通り受け取るのではなく、客観的にみることを可能にし

ているのだ。親は子供を理解し、許さなければならない、ということをオステルは教えてくれる。

さらに教育的という観点からみた場合、『子供たちとこれら』について指摘したいのは、ロシア社会に一般的にみられる、大人の子供に対する「世話焼き」が多いこと<sup>32</sup>、言ってみれば「教育過多」をオステルが暗に批判していることだ。

## 6. ロシア語・ロシア文化の授業とオステルの作品

ロシアの国語の授業でオステルが取り上げられていることは述べた。ここでは日本の大学の授業でオステルの作品を取り上げる可能性について考察する。

まず『有害な助言』を利用する場合を考えてみたい。

ロシア語について言えば、子供の本であるため、語彙がロシアの学校生活や児童の日常生活を知らないとわかりにくいものもあるなど一定の困難さはあるが、詩であるため覚えやすく暗記させることでロシア語の慣用表現などを理解させることができると考える。

例えば、ロシアの文化事情の説明としても使えるのは、『有害な助言』の中にみられるロシア文学や歴史の知識が織り込まれたパロディーの『助言』である。

文学の授業に遅刻したときは、病気の叔父さんに病人を大切にしなさいと言われたので、しかたなく枕を直していたからだと言いなさい。

ロシア人なら誰でも諳んじている有名な古典、プーシキンの『エフゲニー・オネーギン』の冒頭、主人公が病気の叔父を看病しているという部分である。文学の授業に遅れても、このような当意即妙な受けこたえができれば先生も許してくれるだろうか。ただ、ここではもともとなった文からすべてを正確に引用しているわけではないこと、また、「病気のおじさん」の「病気」という形容詞が、中立的な「больной」でなく、хворый という俗語を使っていることでパロディーとなっている。<sup>33</sup>

・先生に、クトゥーゾフはなぜボロジノで軍事会議を招集したのかを説明しなさいと聞かれたら、腕を組んで、不幸な4点では敵に秘密はもらさないと言いなさい。

「不幸な4点」というのも面白い。4点は良い成績だが、5点ではない。5点が欲しい生徒は自分自身の準備不足を意識している。その生徒にたいしてユーモラスな解決策を与えている助言である。ここでは1812年のナポレオン戦争が念頭に置かれている。ボロジノ（ロシア軍とフランス軍の有名な戦闘があった場所）での会議というのが史実に正確なのかどうかは不明であるが、クトゥーゾフはナポレオン戦争の際のロシア軍の将軍である。腕を組んでいるというのは明らかにナポレオン（ロシアの敵）のことだ。

<sup>32</sup> ロシア人によく見られるこのような気質については、毛利久美「不条理の論理—グリゴリー・オステルの世界—」（『スラブ研究センター研究報告シリーズ』88号、2002）でも指摘されている。

<sup>33</sup> Воровьва Т.А., Гусева К.: Языковые средства создания иронии во «Вредных советах» Григория Остера. // Филологические науки. Стилистика и риторика. URL: [http://www.rusnauka.com/17\\_AND\\_2011/Philologia/2\\_89209/doc.htm](http://www.rusnauka.com/17_AND_2011/Philologia/2_89209/doc.htm)

大学でロシアの教育制度を含むロシア文化の授業でオステルの作品を取り上げる意義を考えてみたい。ロシア文学（児童文学）において占めている位置について説明する際にはロシアのフォークロアの一例として『助言』を紹介することができるだろう。前述したように『有害な助言』は、子供たちの間で話されている怪談話などに源泉があることは明らかであり、子供たちの間で話されてきた「サディステックな詩」と呼ばれる詩の形式で書かれたブラックユーモアに満ちた詩に影響されているからである。こういった詩について、1986年にモスクワに滞在し、現地の小学校に子供を通わせていた狩野亨氏は『都会に生きるフォークロア』で次のように記している。

1970年代頃から都会の子供たちの間でブラックユーモアが広がりだした。詩形式のもの、散文形式のもの活字を経ずに口から口へと伝えられ、さまざまなヴァリエーションを持つようになった。主人公として登場するのは人食い人種や人殺し、無邪気なまでに残酷な子供たち、冷酷残忍な両親、祖父母、巨大にして無情な機械などだ。ナンセンスでグロテスク、そして滑稽な、それでいて血の凍るような話は、それ自体が現代社会を物語っている。<sup>34</sup>

例として挙げられているのは、次のような詩だ。<sup>35</sup>

小さな男の子が建築現場で遊んでいました。  
間違っセメント樽に落ちました。  
お母さんは朝店にお買い物、  
壁から坊やの顔が笑いかけています。

筆者がロシア人の知り合い（35歳女性）から聞いた詩は以下の通りだ。

小さい男の子がピストルを見つけました。  
村にはそれから誰も住んでいません。

かなり陰険で不気味で、不快感を呼び起こすものが多い。口にすることがはばかれるようなものもある。いわば子供たちの「小話」である。子供のもっている残酷なものへの関心、いじわるな本性を表現しているといえよう。また子供が無意識に感じている抑圧（学校であったり、社会であったりする）への反発や、不思議で怖いものに惹かれる性質もあらわしているといえよう。

オステルの『有害な助言』が90年代、ソ連崩壊とともに人気を博すようになったのはなぜか。それまで「口伝え」で流布していた話などを、巧みな文体を駆使して「助言」として作品にしたことで、子供も大人も純粋な文学というよりも、普段の会話がもとになった、親しみやすい話と受け取ったからではないか。ロシア人のユーモアといえば「アネクドート（一口話）」が盛んであ

<sup>34</sup> 狩野亨「都会に生きるフォークロア」伊東一郎編 『ロシアフォークロアの世界』,群像社、2005年,122頁。

<sup>35</sup> 同上 128頁。

ることが知られているが、ソ連時代には、その痛烈な政治諷刺さゆえ、話されるのは主に仲間内に限られていた。しかし、ソ連崩壊の自由化の中で、アネクドートも変貌し、インターネットのサイトでも読めるようになった。オステルの役割も、大人のアネクドートと同じようなことが言えるのではないか。つまり、子供たちの「アネクドート」を、ソ連崩壊後に大人のアネクドートが公けになったように、作品において「大衆化」させたのではないだろうか。オステルのユーモアが、諧謔的であるのも、あまりに辛辣であるために、おおっぴらに話すことを差し控えたいくなるようなジョークがもとになっているからではないか。日本でも子供たちが有名な童謡などを諧謔的なパロディーにしたりすることはよくある。『有害な助言』は同じように子供のフォークロアをもとにしていながら文学として成立しており、日本の若者にとってもオステルの作品を知ること、自身が子供時代につくったり友達同士で披露しあっていた詩と、ロシアの子供の詩の共通性などを知り、ロシアのユーモアの特質を理解することができると推察できる。

## 7. 結論

オステルはインタビューで次のように発言している。

あらゆるよい本は、どんな場合でも、良い教育的な機能を持っています。それに対して悪い本というのは否定的な教育的機能を持っているのです。子供たちに退屈で面白くない本を読ませたら、これは一種の反教育的行為なのです、なぜならそれは、あなたを信じてはいけなくて子供に教えることになるからです。<sup>36</sup>

この発言にはオステルの創作の基本的な姿勢が示されている。子供たちを楽しませながら知らないうちに自分とまわりの関係に気付かせるのだ。「大人は子供から生まれたのです。また子供も大人から生まれたのです」というオステルの発言も、我々読者がオステルの作品が子供と大人の両方に向けて書かれたものと意識させる。大人はオステルの皮肉から、自分たちの行動をよく考えて反省することもあるだろう。子供が面白いものを感覚的に理解する能力をもっているということをオステルは信じている。重要なことは、オステルが決して教えるような姿勢を作品の中でとっていないことだ。ポレワは、「親を家族の懐に戻し、子供と大人に対してお互いを説明し、生産的で建設的な対話を確立することが、オステルのグローバルな課題であり、その問題の解決のために芸術上の手段—作り話—*небылица*—を使っているのだ。<sup>37</sup>

筆者は、オステルがロシアで人気があり、作品のユーモアが理解され、それが作品にある教育的効果をもたらすことに成功しているのは、アネクドートなどがロシアで発達していること、オステルの作品の素地となった「子供のためのフォークロア」などの性質によるものと考えられる。

作家の米原万里氏の『必笑小噺のテクニック』では、アネクドートの手法の一つとして、「誇張と矮小化」が挙げられている。例えば、子供に危険であることを教える場合、何かを

<sup>36</sup> Григорий Остер: «Заставлять ребенка читать скучную книгу-учить его вам не верить» //Аргументы и факты.27.11.2009.URL:<http://www.aif-nn.ru/article/9160/14>

<sup>37</sup> Е.А.ПОЛЕВА : Педагогические взгляды детского писателя Г.Остера и особенности их выражения//Вестник ТГПУ(TSPU Bulletin).2013.6(134).с.91.

してはいけないことを伝える場合、ダメといえればそれをしたくなるのが人間の性である、しかしかといって、禁止を解くだけでは、禁止したことがらの魅力が半減してしまうので、禁止したことの危険性を伝えなければならないが、ただ危険だというだけでは効果がありません。米原氏があげているのは、実際に見聞きした次の例である。信号待ちをしている子供が母親に信号が赤でも渡っていいかと聞いた。それに対して親は危険だから、ダメといわず、「渡ってもいいのよ、その代わり両手を挙げて渡るのよ」といった。子供が「ドライバーにみやすくするためか?」と確認したら、母親は「いや、死体安置所でシャツを脱がしやすくするためよ」と答えたという。死体安置所という誇張とその後のシャツを脱がせるという日常的な矮小化によってより危険が生々しく感じられる、というのである。<sup>38</sup>

これをオステルの「助言」に照らしあわせてみると、例えば、先に挙げた助言「カエルを棒でなぐってみよう。とても楽しいよ。ハエの羽をむしるのもいい。やつらは歩けばいい。毎日そのように鍛えていれば、いつか君にチャンスがきてどこかの帝国で一番えらい処刑人になれるかもしれない」という助言は、悪事を誇張することで別の次元に我々を引き入れ、悪事が相対化される効果がある。

また、次のような助言は、皮肉で反語的であるが、アネクドートの「オチ」になっているといえよう。

一番の親友が滑って転んだら、指でさして腹を抱えて笑いなさい。水たまりの中で、君がちっとも心を痛めていない様子を見させておけばいい。本当の親友なら友達が心を痛めている様子を見たくないだろうから。

例えばこれはこのような小噺風にもできるのではないか。

—君の親友だろう。水たまりにころんでいるのは。なぜ笑ってるんだい。ひどいじゃないか。

—そうかい。あいつが親友の僕が悲しんでいるところを見たくないと思ったんだよ。

オステルの作品を取り上げて、ユーモアの方法と教育的な意義について論じてきた。もともとユーモア、風刺は、事物に距離をおいてみる態度、社会が要求している一般的なもの、常識に対して異議を捉える側面がある。オステルの場合も、彼のユーモアの背景には、ソ連時代の全体主義的な画一主義に対して強く反発する気持ちがあった。特に『助言』にみるオステルのユーモアが共感やペースではなく、挑発的であるのはそのせいだ。オステルのユーモアは、登場する人物が風変わりであっても、すべて日常的なものから出発している。ごく当たり前にあるものから意外なものを引き出す。ユーモアを理解するためには、共通の意識がなくてはならない場合も多い。ソ連・ロシアのアネクドートの面白さを理解するには、社会状況を知らなければならないだろう。オステルの作品を読むと、彼がロシアの子供たちの様子をよく観察し、彼らがおかしみを感じることをよく理解していることがうかがわれる。オステルは常に子供の側にたっている。子供がよく話しているユーモラスな物語を題材にするとき、オステルは自分が作者であることをやめて、子供たちの代弁者になっているように

<sup>38</sup> 米原万里『必笑小噺のテクニック』,集英社新書,2005年,110-111頁。



思える、オステルには「怪談話」を集めた『恐怖の学校』という作品があるが、ここでは、読者に対して「自分でつくった怪談を書いてください」という頁があったり、『有害な助言』でも「この部分はあなたが作ってください」という詩もある。大人にとっては、オステルの「助言」によって、子供のもっている発想を大切に、子供からむしろ学ばなければならないことを知る。ユーモアをもった諷刺ゆえに、大人にとっても決して強制されたような感覚は起きない。本論でも述べたが、オステルはそれまで巷で話されていた話を、言葉の遊戯や、ユーモアの手法を使って新しいジャンルを開拓したのである。オステルの『助言』は、確かにタブーであるものや事象を取り上げている。たあいもない助言も多い。よく読むと、様々な解釈ができるものが多くある。しばらく考えなければ面白さがわからないものもある。

このような諧謔的なユーモアを許容するロシア社会のある意味での大らかさに驚嘆せざるを得ない。前掲の『必笑小噺のテクニク』の中に、米原氏が実際にロシアで見聞きした、アネクドートを凌駕するような実例が挙げられている。

母親と息子がピロシキを立ち食いしている。道が凍っているものだから、息子がピロシキ片手に面白がって滑っている。その息子に向かって母親が怒鳴りつける。

「調子に乗ってひっくり返るんじゃないよ。頭蓋骨がちわって脳みそがはみだしてごらん。あたしの食欲が台無しだ！」<sup>39</sup>

どぎつい子供に対する「教育効果」はてきめんであろう。ロシア社会の根っこにあるユーモアの感覚がオステルの作品に脈打っている。

日本では、オステルのいう「愚かさを予防する予防注射」にアレルギー症状を起こしてしまう例がまだ多いのではないかと思われる。

#### 参考文献

1. Г. Остер Дети и эти: Детская книга для взрослых, Взрослая книга для детей М. , :Астрель, АСТ,2013.
2. Г.Остер Вредные советы: Книга для непослушных детей и их родителей.М.:Астрель,2002.
3. Г.Остер Вредные советы-2: Книга для непослушных детей и их родителей. М.:Астрель, 2008
4. Г.Остер Вредные советы-3: Книга для непослушных детей и их, родителейМ.:Астрель, 2009.
5. Г.Остер Вредные советы-4: Книга для непослушных детей и их родителейМ.:Астрель,2001.  
(以上は『有害な助言』のテキストであるが、これ以外にも様々な版があり、インターネットでも読むことができる。)
7. Г.Остер Легенды и мифы Лаврового переулкaМ. Акпресс,2009.
8. Г.Остер Школа ужасов.М. Астрель,2001.
9. Russian Children's Literature and culture. Edited by Martina Blina, Larissa Rudova. Routledge,2010.
10. 伊東一郎編 『ロシアフォークロアの世界』、群像社、2005年.
11. 原昌『児童文学の笑い—ナンセンス・ヒューモア・サタイア』、牧書店、1974年.
12. 『ロシア児童文学の世界』—昔話から現代の作品まで—、国立国会図書館国際子供図書館

<sup>39</sup> 米原万里,同上,112頁。

編、 2005 年.

(受付 : 2015 年 2 月 12 日, 受理 : 2015 年 3 月 21 日)